

2007. 10
22 23 24

特集 大会講演

NHK学園は今年五回の短歌大会を開催しました。そのうち伊香保、熊野路田辺短歌大会の講演録をお届けいたします。岡井先生が、現代歌人を中心に取上げて解説する「私の好きな歌人たち」。森岡先生が戦中、戦後の時代を中心にお話した「自作を語る」。どちらの講演も大変興味深い内容ですので、ぜひおたのしみください。



●NHK学園生涯学習フェスティバル

演題 私の好きな歌人たち

講師 岡井 隆先生

熊野路田辺短歌大会

とき／二〇〇七年七月六日

ところ／和歌山県田辺市

演題 自作を語る

講師 森岡 貞香先生

伊香保短歌大会

とき／二〇〇七年五月十七日

ところ／群馬県渋川市



「私の好きな歌人たち」

岡井 隆

言葉派と物・事派

岡井でございます。

司会の方が、今日の私の話について、森鷗外から斎藤茂吉というふうに言っておられました。皆様にお渡しした資料には、森鷗外の影もなければ、斎藤茂吉の影もありません。何だ、広告と違うじゃないかということになるわけですが、広告を書きましたのは一年くらい前でして、その間にお話したいこともだんだん変わって参りました。

私はカルチャーセンターその他で講義していきまして、あまり他の方が評価していないようなもの、まだ評価の定まっていないような歌集を選んでお話ししております。この半年くらいの間に取り上げた中から、私が一番好きだったという限定付き「私の好

きな歌人」ということで今日はお話したいと思えます。従って、大鷗外も大茂吉も割愛させていただきます。その点をちょっとお許し願いたいと思います。

資料に書きました歌は、皆さまが歌を作る上で少しでも参考になればいいということとはもちろんですが、私自身が刺激を受けて歌を作りたくなったという、そういう作品もいくつか入っています。

最初に高野公彦さんの歌を二首あげました。「甘雨」というのはわりあい最近の歌集です。ある賞の対象になりました、私も選考委員の一人として読んだのですが、広辞苑とか漢和辞典、民俗学辞典などを何種類かそばに置いて、それを引ながらやっとなんと解るといって歌が多くありました。

高野さんは言葉にとっても興味がある方でして、この言葉を生かすために歌を一首作

る。歌が先ではなくて、言葉が先というふうなところが大変強いわけです。こういう作り方を所謂「言葉派」と称するわけですが、言葉派に対するのは何かと言うと「物派」とか、「事派」です。例えば、どこそこへ旅行したというような事があって旅行の歌を作る。この場合、旅行中の見聞が大事になります。ところが、高野さんは平生いろんな本を読んでいて、あ、面白い言葉がある。これを使って一首作ってみようと言うふうには、言葉を引き金にして歌を作ります。

こういう作り方は、従来、短歌の世界では邪道とされてきました。短歌というのは言葉ではない、感動が中心であると。感動を誘うような大きな事件があったとか、あるいは身近の事でも、とてもめでたいこと、悲しいことがあったとか、それによって心

が揺り動かされる事があって、それを詠い上げるといのが歌であるという考え方で、す。たいていの教室ではそう教えますし、だいたいの本にもそういう風に書いてあるわけです。

しかし、実はそうばかりではないのです。万葉以来なのでありますが、特に古今和歌集には物名歌というのがあります。物の名前が引き金になって、その物を歌のなかに詠み込むのです。「こういう言葉が面白いが、これを詠み込んだ歌を一首作ってごらん」と言って作らせるといような場面が、万葉集にさえ出ております。言葉派は邪道であると言うけれど、そうでもないということがあります。

握り飯、むすび、屯食とんじき 山岳のかたち
美味よ味はひも良し 高野公彦『甘雨』

意味は極めて明瞭で、握り飯の形がよくつて、味わいがよい。こんないいことないですね、というのです。握り飯が歌の材料ですが、これは明らかに、屯食というおそよ聞いたことのない言葉が面白かったに違

いないということが解るわけでありませぬ。屯食を辞書でひきますと、これはある地方、ある時代に握り飯のことをこう言ったということがわかります。

何が面白いのか。同じ物に対して、「握り飯」と言う言葉があつて、「おむすび」と言う言葉もある。そして「屯食」と言う面白い言葉もある。ひとつの物に対して人間がいろんな言葉を使う。多分「屯」は村を指すのではないかと思いますが、言葉の響きが面白い。ある物に関していろんな名称があるということ、これが、高野さんを刺激したのだと思います。「山岳のかたち美味し」は、山型になっているという、それだけのことです。おむすびは丸くむすぶ場合もありますからね。

麦の酒、芋の酒よし食酒けさけして日々の夕
餉けを麗うしうする 高野公彦

高野さんと居酒屋で飲んだことはありませんが、公式の場面で飲んだことはあります。大酒豪であります。私などはチビチビ飲んでいますが、あとからあとから酒

をついで、グイグイ飲むというタイプの人は、あまり酔っ払わない。

麦の酒でありますから、多分ビールで、芋の酒は芋焼酎でしょうかね。よしと言っていますから、ビールでも芋焼酎でもけっこうだよと。その次の「食酒」という言葉ですが、私は知らない言葉でした。肴をつまみながら、あるいはお塩をなめなめお酒を飲む。お酒が主になるのが普通の飲み方だと思つてありますが、食酒というのは、食事を取りながらお酒を飲むことだということです。

私は実は食酒派で、米のご飯を食べながら、米のお酒を飲むというのを結構やる方です。本当にお酒の好きな人は、おそらく塩だけでもいいからお酒が飲みたいのだと思いますけどね。

高野さんは、お酒だけ飲むのもいいが、食酒もいいよ。今日は食酒をして、「日々の夕餉を麗しくする」、つまり食事だけだとそんなに麗しくないのだが、酒があつて、それでご飯食べるといのがいいというわけです。これも事実の問題よりも、「食酒」という言葉に、ああ、日本語とい

うのは広いな。いろいろな場面に対して、いちいち字をあるいは言葉を当てはめるのだなあと、それを歌にしているんですね。

言葉から広がる想像力

岡山に長く住んでおられまして、去年亡くなられました安立スハルさんの歌です。私は若い頃からとても好きな歌人でした。生涯に「この梅生ずべし」という歌集を一冊お出しになっただけでした。早く次をと、みんなが言ったのですが、ご本人はお出しにならなくて、七十何歳かで亡くなられたわけがあります。

お亡くなりになったあとで、コスモスの



結社の方から『安立スハル全歌集』がออกมาして、待望のその後の歌を読むことができました。

くちなはにくちなはいちご村の子に苗
代苺赤らむ夏ぞ

『安立スハル全歌集』

「くちなは」は蛇のことですが、「くちなはいちご」なんていう言葉はないです。蛇いちごを翻訳して「くちなはにくちなはいちご」と言ってます。別に蛇がいちごを食べるわけではないでしょう。だけどそれをおもしろがっている。「くちなはいちご」という言葉が片一方にある。もう一方には「苗代苺」という言葉がある。これは苗代のころに丁度熟する木苺のような赤いいちごであります。「くちなはにくちなはいちご」「村の子に苗代苺」、こういう一つの対を作ります。「赤らむ」は「くちなはいちご」にも「苗代苺」にもかかっていくわけでありませう。この歌も結局、言葉が主になっっていて、対句の使い方のおもしろさ、全体の響き、リズムが一首を作っています。

男より女はさらにむづかしと見えてくる
なり年をとること 安立スハル

七十一歳の時にお作りになった一連の中の歌です。こういうのは言葉ではなくて事柄を大事にして詠っている。男と女を比べて「ごらんなさい、私は女なんだけれど、どうも年のとり方のむづかしさというのがある。男はわりと上手にというか、簡単に年をとれるんだけど、女である自分は年のとり方が結構むづかしいんだよね、と云ってるわけがあります。

安立さんの「くちなわいちご」の歌と同じような対句を見つけてきました。小池光さんは六十歳、還暦になったばかりの方で、長く学校の先生をしていましたが今はお辞めになって、歌人として、あるいは物書きとしてやっていらっしやいます。

戦没者といひかへしとき戦死者のする
どき眸はみえなりぬ 小池光「静物」

戦争が終わって六十年以上たちました

が、どこの国も過去の戦争のことを忘れられないでいます。戦争で亡くなった人を戦死者と言っていたと思うが、いつ頃からか戦没者慰霊祭とか戦没者慰霊碑と言うようになった。戦死と戦没というのはどう違うのか。戦争に行っただけで、銃に撃たれてとか、空襲で死ぬとかということではなくて亡くなった人もいらっしやる、そういう人も全部入れるのかとか、理屈はいろいろあるでしょうが。

どうも「戦死」というときつい。「死（し）」という音は、「い」の母音が入る。音声学の方でも、「あ」の入る音は明るく、広い。「い」が入るのは鋭くなるということがあります。「戦死」を「戦没」と言い換えただけで、戦死者の降の鋭さがすーっとかすんでいく。この感じは何なんだろう。婉曲語法という言葉がありますが、言葉にはいろいろな作用があると、小池さんは思われたのだらうと思います。

善良な軽薄さを国是としてきたり割らるるまへの西瓜のやうに 小池光

「きたり」で切れる。三句切れだと思えます。日本人というのは善良な軽薄さを国是——国是と言うちよつと大げさであります。まあ言ってみれば民族性とか、国民性ということでしょう。善良な軽薄さというのがいいのだよ、と一般には言われてきたが、それは一体どういうことなのだと言う時に、それは「割られる前の西瓜」という。

つるつるの、緑色の縞のある、あのきれいなものが、割られたとたんに中の真っ赤なものが前面に出て、別のものを思わせる。割られてますから、ざくざくとした角のある感じがする。西瓜の丸い感じと、割られたあとの感じに差があるわけです。日本人の民族性と言うか、あるいは民族の理想といえますか、そういうものは善良な軽薄さなんだよと言う事を言うために、「割られる前の西瓜」という一つの比喩を設けてます。

こういう、何々のようにと言うのを譬えとか比喩とかというのでありますけど、たいてい謎めいています。「割られる前の西瓜のやうに」と言われて、この作者は何を

考えているのだろうかと考えってしまうのではないですか。それを考えさせるのが作者の小池さんのねらいなのです。

ずっと昔から善良な軽薄さ、善人のもっている一種の軽さ。ま、日本人はどっちかというところ、あまり重苦しい感じよりはそっちの方が好きだったんだよね、と。そうか、そういわれてみるとそうかなと思うんだけど、そこへ「割られる前の西瓜」というような物を持ち出されると考え込んでしまう。まあ、考え込めということなのでしょうね、きつと。

作者の思考の跡をたどる

河野裕子さんの歌集『体力』から二首出してみました。読んですぐわかる歌だったから、こういうところで話す材料にならないのでして、これはちよつと謎のある歌です

子らが古い私が死んでもずっとまだ母親が続くずっと私は

河野裕子『体力』

普通は、死んでしまったらもう母親も何

もないのではないかと思うわけですが、この歌を読んで、河野裕子さんは何をおっしゃっているのかなとしばらく考えました。自分が死んだあとも、子ども達が年をとったあとも、うちのお母さんはどうであったとか、こうであったとか、依然として母親なんだなあ、母親扱いされるんだなあと、河野さんは思うのです。天国へ行こうと、西方浄土へ行こうと、母親がずっと続く私は、何時まで母親をやっていたらいいのかな。子ども達が死ぬまでは、やはり母親なのか。こういう感想であります。

死者の数あはく殖えゆきし歳月と九十年ほど生きて思ふ日あらむ 河野裕子

今、河野裕子さんは今六十歳ちよっと、この歌は多分五十代の歌だと思えます。そうすると、「九十年ほど生きて」というのは四十年以上先の話でして、そんな先まで生きるつもりですかと、ちよっとこちらも聞きたくなっちゃうわけです。

この歌は、あの頃は丁度、自分を取り囲む人たち、友達や同級生、親戚、親、かそ

ういった人たちも含めて、死者の数がだんだん増えて行ったそういう歳月だったんだなあ、何十年か経ったら思う日もあるであろうというのですね。

現在、作者の周りでは、現実にながすこしづつ死んで行くんですね。知っている人が死んで行く。しかしそれらの死に方は、「あはく殖えゆきし」ですから、いちいち強烈な印象を残して死んで行くという事ではないのです。

河野裕子さんのこの二首は、ある年齢になると必ず考えざるを得ない、自分自身を含めての人間の死——少し暗い話ではありますが、必然の運命でもある話です。これは、歌の材料になり得る。不安感もありまじ、どのような死に方がいいかという話もよくされるわけがあります。

このふたつの歌は、他者の死を含めて、かなり複雑というか、普通の人は考えつかないような形で歌っています。自分は死んでも、ずっと母親でありつづけるんだなあと思う。また、数十年経ったときに、ああ、あの頃は自分の周りに死者があわく殖えていった時期だったと思うんじゃないかしら

と。

一首に物語を紡ぐ

次は有沢螢さんという、面白い名前の方の歌であります。

嫁にゆく狐あるらし嫁にゆかぬ狐もあらむ歌よむ眞昼

有沢螢 『朱を奪ふ』

狐。そう知り合ってもない狐さん。お嫁に行くのか行かないのか、誰もあんまり考えたことはないでしょう。

でも、狐の嫁入りという、昔からみんなが知っている言葉があります。「そばえ」とも言いますけれど、天気雨ですよ。陽が照っているのに雨が降る、あのことを狐の嫁入りと言いますね。もうひとつは、特に雨が降った夜なんか、よく墓地などで燐火みたいなものがぼーっと見えたりする。昔から怨霊の火ではないかと言われている。あれのことも狐の嫁入りと言います。何で狐が引つ張り出されるのか。狐にしてみれば多少迷惑なところもあるかも知れま

せんね。

作者が狐を持ち出すのは、今日は狐の嫁入りのようにばらばらと雨が降って、日が差している。しかしそうではない日もある。「嫁にゆく狐」もあるらしいが、それなら「嫁に行かぬ狐もあらむ」という空想をして、その中で作者は歌を作っているわけでありませぬ。

この歌も「狐の嫁入り」というひとつの言葉、さっきの高野さんの「屯食」とか「食酒」、あるいは小池さんの「戦没者」と「戦死者」の違いなどと同じように、物の考え方よりも、日本人が従来使ってきた言葉から引つ張りだされて、出てくる歌ですね。

高野公彦さんから河野裕子さんまで、いくつか挙げた歌はやや人間の生活、あるいは死というようなものと結びついた歌が多かったのですが、有沢さんの歌はかなり空想的といえます。でも、それも人間が空想するという意味では人間についての事実なのだろうと思うのですね。有沢さんというのは、もちろんペンネームだと思いますけれども、そのペンネームに相応しいよう

な面白い歌があります。

白金の坂のしたなる帽子屋に西日のほかに入るひともなく
有沢 螢

白金というのは、東京にある地名であります。私が最初に勤めました病院が白金で、有沢さんが今勤めていらつしやる聖心女学院というミッションスクールは、その病院のすぐ隣にありまして、有沢さんと私は時代も違い、お互いに知らないわけですけど、白金というところで二人とも勤めていたわけでありませぬ。

坂の多い街で、白金の坂を下りていきますと、そこに帽子屋さんがある。その帽子屋さんに今、西日が燦々と差している。これはなんでもなくよくある普通の場面です。「西日のほかに入るひともなく」、帽子屋さんに入っていく人もない。それだけのことなのですが、そこから一つの物語を作り出したのが、有沢さんの一つの手柄だろうと思えます。

有沢さんは、歌集からだけの勝手な想像でありますけれど、ご結婚なさっていない

らしい。そうすると、多分ご自分を嫁入りをしてしない狐の方へ分類していらつしやるのかも知れない。いろんなことを考えさせられますが、そういうひとつの事柄から空想で歌を作るといっても、一つの作り方だと思えます。

山中智恵子の歌の魅力

山中智恵子さんは三重県の鈴鹿市に長く住んでいらした方で、前衛短歌系の女流歌人の代表と言われています。亡くなられて、今年、全歌集二巻が出ました。まず上巻が出まして、それを読んでいろいろなことを考えたわけです。晩年に『黒翁』という特殊な歌集がありまして、今日はその中から二首選んでみました。

山中さんの歌は難解であるということまで有名で、あんな難しい歌は敬遠したくなるという人も多いわけですけれど、この「猫ロマンチズム」という一連の歌は猫が題材です。猫の歌というのは今とても増えています。歌人に一番人気があるペットかも知れませぬ。猫文学というのが成立するのではないかと思うくらいです。山中さんの

「猫ロマンチシズム」は、ネオロマンチシズム、新ロマンチシズムという言葉をもじったんですね。猫をロマンチックに捉えようということかな。

長すねの面長の猫歩みくるアビシニアン
アンカ緑眼美髭

山中智恵子「黒翁」

山中さんの鈴鹿の家の周りには猫がいっぱいいたのでしょうか。そして、それぞれの猫に名前を付けるのですが、観察もいろいろとしています。長すね、足が長いのですね。そして、面長というのは要するに長い顔っていうことですけれど、面長の猫というのは私は見たことがない。前衛歌人のそばには、変わった猫が集まるのかな。アビシニアンはエジプトの——飼猫の発祥の地はエジプトだと言われていますが——飼猫の一番古い種がアビシニアンです。

流星雨に濡れてまゐらうやよ猫よ猫の宇宙の時は来れり
山中智恵子

ねこロマンチシズムの十数首、一気に書いておられる感じがいたします。人間は嫌だけれど、今や猫の宇宙がやってきた。「猿の惑星」という映画がありましたけれど、ああいうのですかね。猫が主人公、人間はそれに使われているみたいな感じでしょうか。

今夜は流星雨が降るって言うじゃないか。流星雨では、もちろん濡れるわけじゃないですよね、流れ星ですから。だけどそれを、雨という言葉から発想して、「流星雨に濡れてまゐらうやよ猫よ」と。春雨じゃ濡れて参ろうと同じで、流星雨じゃ濡れて参ろうと。今や猫の宇宙の時がやってきたようだというのですね。

有沢さんの歌が空想的だと言ったけれども、山中さんのは、もうこれは空想そのものでしかない。猫はいっぱいいるでしょう。いるでしょうが、それを緑眼美髭という形で捉えたり、猫の宇宙の時代がやってきたんだ。宇宙から降る流星雨に濡れて今夜は猫よ、行こうじゃないかなどと言っているのは、およそ現実の自分からは離れているように見えるわけですね。

作者の山中さんはどうしてこういった歌を作る気になったかということをおぼろげながら想像するわけがあります。ご主人が割り合い早くになくなられましたか、五十代くらいで、あとお一人になられました。お子さんはいらっしやいませんか。病気もいろいろしていらっしやいまして、鈴鹿市に一人でお住いであります。

歌の会合などがあっても気軽に出かけられるような状況でもありません。一時ちょっと精神的にも惑乱と言いか、特にご主人が亡くなられた後、そうだったのでありますけれど、異常な状態になられたこともありました。すぐ近所にご親戚の方がおられました。ほとんどお付き合いがなかったようです。

そうすると、猫は自分の遊び相手として、この世における友達として、意外と山中さんにとってはリアルな物だったのかもしれない。だから一匹一匹に山中流のおもしろい命名をいたしました。簡単な、普通われわれが付けるような名前じゃないですよ。

一人の女の人の孤独感というのかな。猫ロマンチシズムというようなことを考えざ

るを得なかった一人の思い。一人で生活する人間の思い。それが、猫の方へ跳ね返っていったのではないかと、僕は山中さんをよく知っておりましたので、そう思っただけでした。

下敷きのある歌

若い笹公人さんの歌を二つ真ん中には喜んで、塚本さんの歌に「こうかと思いません。

すさまじき腋臭の少女あらわれて祖母から母へわたる竹やり

笹公人『自選作品』

笹公人さんは三十二歳でしょうか。「念力家族」という面白い歌集をお作りになっています。歌集を開くと、見開きの片方の頁にまんがのような絵が描いてあって、もう片方の頁に歌が一首、大きな活字で組まれています。読みやすいと言えば読みやすいのですが、今までにはなかったような歌集の作り方です。出版社の方針もあったのでしょうか、コンビニで売ったとしても評判になりまして、何千部と売れました。私

の歌集なんかは十年がかりでやっと千部売れるかと、非常にさびしいことやっているのですが、彼の場合は、あつという間に三千部が売れるということで、最近の若い人の中では、ちよつと目立つ歌人です。

だいたい、「すさまじき腋臭」なんてものは普通は歌に作らないのでして、もし作るとしたら、相手に失礼ではないかとか、そういうことを思うわけがあります。もちろん実際にそういう腋臭の少女が現れたかどうかはわからないのですが、腋臭の少女連作で、「すさまじき腋臭の少女あらわれて」と言う上の句は同じで、下の句の違う歌がずらつと並んでいます。見開きで一首ですから、頁を繰るとまた腋臭か、また腋臭か、ということになる。

この歌で私が注目したのは、「祖母から母へわたる竹やり」というこの辺のところですね。笹君にはおばあちゃんがいらつしやって、お母さんもいらつしやるのだと思うけど、おばあちゃんがいやに印象的なのです。どういう世代のおばあちゃんでしょうかね。竹やり世代は僕らがそうです。戦争の末期、竹やりでアメリカ兵と戦うとい

う、そういう世代。おばあちゃんの世代からお母さんの世代へ竹やりが一つ渡されてゆくという。何もそれは腋臭の少女が現われなくなつて渡されるのですけどね。

彼の歌では何かそういう一つの物語ができています。戦争のことを若い人は全く知らないかというところ、そんなことないんですね。テレビが毎年のように映像を流し、それから自分の親とか祖父母から話を聞く。耳から聞いた話というのは割合と大きいようですね。

目をこすり何度見たつて船長の肩のオウムは死んでゐるすら 笹公人

「すら」なんて言うところが笹君のやり方なんですけれども、この歌をなぜ出したかと言いますとね。歌を作るときに、なにか他の話を持つてくるということがありますね。誰でも知っているような歌謡曲、あるいは小説でも童話でもよろしいです。さつき狐の嫁入りが出てきましたが、「うさぎとかめ」と言ったら、これも誰でもが知っている話です。うさぎを歌の中に出し

てくると、ああ、うさぎってのは早足だ、かめは遅いんだと。だけど途中でうさぎはぐうぐう寝てしまうから、最終的にはかめが追い越しちゃうんだよっていう、教訓物語です。そうするとそれが一つの歌の下敷き——難しい言葉使うと「引用」と言うんですけれど——となります。

笹君のこの歌は何を引用したかというのと、スチープンソンの「宝島」です。シルバーという海賊が出てくる話です。まんがにもなってますし、映画にももちろんなってますからご存知でしょうが、肩のところにおウムを止まらせてるんですね。そのイギリスの海賊船長さんの肩のおウムは死んでるじゃないか、と言っているのでありません。

続いて、塚本邦雄さんの歌を読みます。塚本さんははついでこの間が三回忌でして、東京をはじめそれに関連した会合がございました。

孔雀飼ひはじめたりと父の初便りあは死の外に飼へるはそれか

塚本邦雄『風雅黙示録』

孔雀を飼いだめたとお父さんから初便りがあった。初便りというのは正月になって初めて来る手紙ですね。孔雀を飼いだめたと言っけれども、外に死というものを飼いだしてはならないか。「死を飼いだす」というのは、これは西欧の人が初め言いだしたのですけれども、よく知られた言い方で、例えば非常に重大な死病を持っているが、その死病と慣れ親しんで上手に付き合いながら余生を過ごすという生き方。それを死を飼いだすというふうに言いならわすのです。

お父さんから手紙が来て、今度孔雀を飼っているんだよ、と言ってきた。へえ、お父さんはもう死んで言うものを飼いだしてはならないの。それ以外に孔雀を飼うんですか、というのが内容であります。

春季大掃除二階のラジカセのイゾルデの Aria 停める、いますぐ 塚本邦雄

イゾルデはワグナーの楽劇の「トリスタンとイゾルデ」のことで、ラジカセからイゾルデの Aria が響いてくる。ラジカセ

などという言葉は、すでにちよつと懐かしい感じがしますね。丁度春季大掃除でして、掃除機が回っていたりして、相当な音をたてて大掃除をやっている。せつかくのイゾルデの Aria じゃないか。もうこの辺で停めなさいと。

実はこのイゾルデの Aria を知っているか、知ってないかということでは理解が変わってまいります。先ほどスチープンソンの「宝島」を下敷きにした笹さんの歌を出しましたけれど、読者と作者が共通した知識を持っているときだけ意味を持ちうるような歌も、ひとつの歌の作り方です。

それを知らない人に対してこういう歌はつくってはいけません。私はいつも知らない人に向かって、それを知らない人がいようがいまいが、自分が作りたいと思ったラジカセとイゾルデだろうが、狐の嫁入りだろうが、シルバー船長だろうが、なんら遠慮なしにお作りになったらいいでしようと言っています。下敷きをもって作るという、そういう作り方もひとつあるということです。

若い現代歌人の歌

最後に柵木恒寿さんの作品。柵木さんだけ四つ出したのは、特に柵木さんの歌がどうというのではなくて、たまたま資料の後ろの方が空いてしまうので四首出したまでです。柵木さんは高等学校で数学の先生をしていらして、笹君より少し上か同じくらいか、三十代前半の身体の大きいわりには声の小さい、好青年であります。

開きたる新聞に不可思議の文字ありて
ちから欲し 夏の朝は来たりぬ

柵木恒寿『天の腕』

不可思議の文字が新聞に満ち溢れているのが、最近は当り前でありますから、説明を要しませんね。

夕顔の咲き上るころ自転車漕ぎてふ
とももを悦ばしめつ

柵木恒寿

この人すごい大きな人でして、力がいかにもありそうなんです。実際はどうかしり

ませんよ。でも剣道部かなにかの指導をやったりした歌があります。自転車を漕ぐとふとももが悦ぶというのですね。これは柵木さんを知っている人は、特におもしろいと思つて読むでしょう。あのおおきな図体で、自転車漕ぐんだと。それと、咲き上る夕顔との対照ですね。

すこやかにわが数式は伸びゆけり教室
に生徒のおらぬ時間は

柵木恒寿

数学の先生ですが、生徒がいるとどうもね、自分の数式というのは伸びて行かない。生徒のいないときのほうが、「すこやかに」伸びてゆくというのですね。

性欲のごと台風は抜けてゆく静かなる
木がいいのだ朝は

柵木恒寿

柵木さんの歌は、こういう解り易い歌であります。結構、暗示性があります。何で性欲のごと台風が抜けてゆくのか、そしてそのあとの静かな木がいいのか。それもなぜ朝に限定して思ふのだろう。開いた新

聞に不可思議の文字が氾濫していて、そういう時に力がほしいなあとこの青年は思うわけですが、「夏の朝は来たりぬ」というような形でどうして歌を収めるのだろう。ちよつと考えますと謎がありますね。

今日は随分アットランダムにいろいろな歌を例に上げてお話し上げました。歌を作るときのきっかけというのは、実に複雑でいろいろあります。その実例というような歌を出してお話ししました。ご静聴ありがとうございました。